

ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その6）

ー釜ヶ崎における聞き取り調査結果をもとにしてー

○ 四天王寺大学大学院 逢坂 隆子（会員番号 5395）

黒田 研二（関西大学・会員番号 2797）、嵯峨 嘉子（大阪府立大学・会員番号 3317）

キーワード：ホームレス者・社会的包摂・生活保護受給者

1. 研究目的

大阪市の釜ヶ崎では、日雇い労働者の高齢化と不況があいまって、野宿生活を余儀なくされるものが増え、高齢・罹患などから生活保護を受給する者も急増している。生保を受給しても閉じこもり、うつ状態、アルコール・ギャンブル依存をはじめ深刻な問題を抱えながら必要な対応ができずに孤独死、自殺に追い込まれる者が少なくない。このような状況に対して様々な民間団体による支援がおこなわれるなかで、支援者との関わりを通じて、「人として生きるパワー」「社会とのつながり」をとりもどし、「釜ヶ崎で生きてきてよかったなあ」と思いながら暮らしている人もいる。本研究ではこれらの人たちから話を聞き、ホームレス者の社会的包摂推進方策を探ることが目的である。

2. 研究の視点および方法

日本学術振興会科学研究費補助金助成事業（課題番号：22614010）（研究代表者：逢坂隆子）の一部として、釜ヶ崎で支援活動をおこなっている26団体から活動の理念・内容等についての聞き取り調査を実施した。さらにその中の7支援団体から「うまくいっている事例」として紹介を受けた13名の生活保護受給者（元ホームレス者）から聞き取り調査を実施した。調査項目は①生活歴、②釜ヶ崎にきた経緯とホームレス生活、③ホームレス脱却に至った経緯、④現在の生活、⑤その他、である。聞き取り内容を質的分析・検討した。聞き取り調査実施時期は2010年4月～2011年11月である。

3. 倫理的配慮

本研究は、四天王寺大学倫理審査委員会の承諾を得ている。聞き取りに際し、研究目的・個人情報保護について口頭で説明し、同意を得た。

4. 研究結果

- ①【聞き取り団体の主たる支援活動の内訳】1)医療・健康支援：4団体 2)就労支援：3団体 3)居場所づくり・相談：3団体 4)アルコール・薬物依存症者支援：2団体 5)炊き出し：2団体 6)居住・生活支援：5団体 7)生きがいと居場所づくり：1団体 8)まちづくり：2団体 9)夜回り：2団体 10)労働者の子どもへの支援：2団体
- ②【うまくいった13事例について】平均年齢：66.4±14.7歳 生活保護受給年数：平均5

年 釜ヶ崎在住年数：平均 32.5±15.7 年 生活保護に至った主な理由：アルコール 5 名、ギャンブル 2 名、精神障害等 2 名、身体的疾患 2 名、失業 2 名 現在の日常生活の主な過ごし方：ボランティア活動 5 名、作業所や就労：2 名、生きがい活動：6 名 現在の「生きていてよかった」と思える生活になった要因：「支援者からの心を動かす働きかけ」3 名、「居住・生活支援(サポーターハウス・救護施設)(金銭管理・服薬管理を含む)」3 名、「生きがいと居場所づくりに結びついた」7 名

③事例 A 氏(男・66 歳)：高校卒業後、公務員として勤務し、結婚。子どもあり。しかし、上司への不満から退職、妻に家を渡し離婚となった。釜ヶ崎在住年数 40 年。釜ヶ崎ではアルミ缶回収・大阪市高齢者特別清掃事業で収入を得ていた。野宿生活中、研究として実施した健診で結核・糖尿病と診断されるも「ほっといてくれ、死にたいんや」と極めて頑固に治療拒否。研究者・保健師・ボランティア学生らの粘り強い説得により結核治療終了。糖尿病治療継続中である。今では、生活保護を受給してアパートで生活し、食事や・散歩に心を配りながら、研究者グループが設立した NPO HEALTH SUPPORT OSAKA のメンバーとして CR 結核検診や訪問型 DOTS 事業に関わったり、自らの体験を学生に話すボランティアをしている。野宿していて襲撃された時が一番怖かった。

事例 B 氏(男・79 歳)：幼いうちに実父が行方不明となり、その後実母も妹だけ連れて再婚する。孤独で苦勞の多い生活を送るうちに「誰も信じない」気持ちが強くなり、釜ヶ崎で日雇いをしながら孤立した日々を送っていた。70 歳になってから生活保護を受ける。居住していたアパートが火災に遭い、駆けつけてくれた支援者とのつながりから「人を信じること」「人とつながること」の大切さに気付いた。現在は、釜ヶ崎を訪れる見学者に釜ヶ崎を案内したり、自らの生い立ちを話すボランティアをしている。釜ヶ崎在住年数 52 年。未婚。アルコール問題あり。最近妹と連絡がつき、会いたいと思っている。母親の墓まいりもしたいと思っている。今の生活が、不安がなくて人生の中で一番いいという。体が弱ってきたので、サポーターハウス(簡易宿泊所転用・支援つきアパート)に居住している。

事例 C 氏(男・91 歳)：家庭をもち、建設現場で働いていた。ギャンブル好きから家庭不和となり、家出をして大阪に来た。以後、建設現場で働きながら、釜ヶ崎やその周辺で暮らす。釜ヶ崎在住年数 51 年。生活保護受給年齢 84 歳。現在も家族とは音信不通であるが、ギャンブルは止め、紙芝居劇のメンバーとして各地での公演に参加することを生きがいとした生活を送っている。

5. 考察

ホームレス者の自立支援は、単に生活保護につなげるだけでは充分でない。社会的に排除され続け、生きる意欲さえ失い、人を信じられなくなったホームレス者が、支援者との関わりの中で、他人への信頼をとりもどし、自分自身を大切にしようになった姿がそれを我われに教えてくれている。